

パーソン・センタード・ケアに基づいた看護実践により

B P S Dが改善した認知症高齢者の一事例

医療法人聖志会 渡辺病院 D3 病棟

田崎 紀子、友寄 直美、神田 若菜

【目的】認知症看護の基本は、その人の個性や人生に焦点を当てたパーソン・センタード・ケア（P C C）と言われている。今回P C Cに基づく看護実践を行い、B P S D改善がみられた一事例について報告する。

【倫理的配慮】本研究の発表に際し、個人が特定されないように配慮し、家族及び施設管理者の許可を得た。

【対象】A氏、80歳代、男性、AD、HDS-R 6点、X-6年頃より物忘れが出現。X-2年排泄失敗や家族への暴力がみられ当院入院。以後も入浴拒否が目立ち、他患者へ大声で怒鳴ることが続いていた。

【方法】P C Cのステップを実践、心理的ニーズを評価した。ステップ（1）思いを聞くでは、スタッフの入浴声かけや洗濯物を片付ける行為に対して「どうして勝手なことをするんですか。」等の訴えを確認した。ステップ（2）情報を集めるでは、几帳面で確認作業を重視する性格であること、及び脳C Tで前頭葉の萎縮を確認した。ステップ（3）ニーズをみつけるでは、①アイデンティティとして、確認作業やこだわりを制止されない環境をつくった。②愛着・結びつきとして、指示せず見守り困っている時は手伝った。③携わることとして、自分のペースで入浴動作を行える環境をつくった。④共にあることとして、行動を修正せず受け入れた。⑤くつろぎとして、習慣を安心して行える環境をつくった。①～⑤をスタッフ全員で共有し、統一したケアを提供した。

【結果】P C C実施後、A氏に笑顔がみられ落ち着いて入浴でき、感謝の言葉を頂けた。また、他患者への暴言頻度が減少した。

【考察】今回、P C C実施前後で明らかに、B P S D改善がみられたことは、P C Cに基づく心理的ニーズを満たすことができた結果であると考えられた。認知症高齢者を一人の人間として尊重するケアの大切さを、本事例を通して学んだ。

文字数 750文字(スペースを含む)